

新収資料紹介

足立喜六資料

このたび、愛知県に所縁があり、教師にして中国史跡の研究者として名を残す足立喜六氏の関係資料を、同氏の孫娘である鶴田温子氏より一括受贈した。足立喜六氏の資料は、近代日・中における歴史遺産の記憶を今に伝えるきわめて貴重な基本資料である。

足立喜六略歴

足立喜六は、土木技術者、数学の専門家。1871（明治4）年、静岡県磐田郡袖浦村（現磐田市）生まれ。1898年（明治31）年に東京高等師範学校（現・筑波大学）を卒業。近代的な教育改革を計画した中国清朝政府から招聘され、1906（明治39）年～1910（明治43）年の4年間、陝西省西安の陝西高等学堂で数学・物理の教鞭を執った。

西安は、かつて前漢から隋・唐にわたる中国歴代王朝の都・長安であった都市である。足立は中国史の研究に関心を抱き、西安滞在中に自ら長安とその周辺地域の史跡・遺跡を現地踏査した。調査したのは漢代・唐代の陵墓、漢・唐長安城およびそれに関連する寺院・石碑・名勝などである。足立はその調査にあたりガラス乾板や暗箱カメラで写真を撮影し、自身の土木・数学・物理学の技術や知識を活かして測量をおこなうなど、当時としては最も早く近代科学的方法により記録を残した。

足立が帰国後に長安の史跡調査の成果と記録を一書にまとめた『長安史蹟の研究』は、1933（昭和8）年に東洋文庫から出版され、当時の昭和天皇に献上された。同書には本文とともに写真171点・挿図38点が収められる。清朝末期における漢・唐代長安の史跡に関する実態が詳細に記録され、現在では失われ、あるいは様相を変えてしまった貴重な情報も知ることができる。中国の歴史的文化遺産の研究と継承に欠くことのできない、名著かつ重要な基本文献であり、初版の後も2006（平成18）年にいたるまで数度にわたり重版と復刻を重ねている。

晩年は現在の名古屋市千種区に住まい、1930（昭和5）年に愛知県立一宮高等女学校校長を定年退職した後は、長安・シルクロードの研究をライフワークとし、『大唐西域記の研究』を出版、『大唐西域求法高僧傳』『入唐求法巡礼行記』『法顕傳』の訳注書を刊行するなど、重要な著作を次々に発表した。1949（昭和24）年に永眠。墓所は千種区・日泰寺。

足立喜六資料の内容

受贈した足立喜六資料は主に、ガラス乾板写真、紙焼き写真、拓本、原稿類、叙勲表彰状、掛軸、書籍などからなる。いまだ資料整理中であるため資料の同定や内容の詳細を明らかにしえていないが、概要を紹介しておきたい。

ガラス乾板は、著書『長安史蹟の研究』に収録された写真の一部の原版である。1914（大正3）年に盗難に遭い現在はアメリカ・ペンシルバニア大学博物館と中国・西安碑林博物館に分かれて所蔵される、「昭陵六駿」（唐太宗李世民的陵墓・昭陵を飾った駿馬の凶像の石彫レリーフ）の盗難以前の姿、則天武后母楊氏の陵墓・順陵の石獸や西安城など主要な史跡の往時の姿が撮影されており、多くの貴重な写真を含む。ガラス乾板の状態はやや劣化がみられるもののおおむね良好である。紙焼き写真もまた同書収録写真が大半を占める。拓本は漢代の画像石、唐代の墓誌や石碑などで、やはり同書に掲載されたものを含む。

他に足立が執筆した著書の手稿や校正刷からなる原稿類、『長安史蹟の研究』献上時の宮内大臣湯浅倉平からの受領状、叙勲表彰状や足立の経歴書などがある。それらからは教育や研究に力を尽くしてきた足立の人となり、業績・経験をうかがうことができ貴重である。

以上、小文ではごく概略ながら足立喜六とその業績、受贈資料の概略を紹介した。アジアにおける文化遺産への早期のまなざしを知りうる重要な同時代資料として今後活用されるものと期待できる。足立喜六資料の展示公開を目指して、目下、資料整理を進めている。資料の詳細な内容を把握次第、再度報告したい。（藤井康隆）



足立喜六資料（一部）